

中央語における動詞活用の歴史

小柳智一

1. 「中央語」の歴史

本稿の目的は、中央語の動詞活用の歴史を概観することだが、日本語史における「中央語」は、近世以前と近代以降で大きく地域が変わる。上代から近世までは奈良・京都で使用されていた方言が中央語だが、近代以降は東京で 사용되는方言に基づく共通語が中央語となる。この捻れは、日本語の一貫した歴史を描こうとする時に支障となりかねない。このような捻れが生じたのには、次の2つの事情がある。

- (1)a. 政治・文化的な中心地(すなわち「中央」)の移動
- b. 言語資料の残存状況の変化

(1a)について。上代から中世までは、長く朝廷が支配的だった奈良・京都が政治的・文化的な中心地である。中世前期に一時的に政治的な中心地が鎌倉に移るが、文化的な中心地は京都であり、中世後期は政治的な中心地も再び京都に戻る。近世以降は、幕府の置かれた江戸が政治的な中心地となるが、近世前期は上方が文化的に優位で、江戸が文化の成熟を迎えるのは後期に入ってからである。その後、近代になって東京が首都として政治的・文化的な中心地となった。このように、政治的・文化的な中心地が近世を境に移動したために、日本語史の「中央語」も地域が変わったのである。

(1b)について。(1a)と深く関わるが、一般に、言語資料となる文献は政治的・文化的な中心地に多く残り、それらはその地域の言語を反映するものである。逆に、政治的・文化的な中心地から外れた地域には古い資料が残存しておらず、江戸・東京以前の東国の方言を明らかにするための資料が絶対的に不足している。そのため、現代の「中央語」から遡って歴史を記述することができないのである。

このような事情で、「中央語」の歴史には捻れが生じるのだが、しかし、これは現代の「中央語」である共通語から遡るせいで生じる捻れである。上代の「中央語」から下って現代の関西方言までを辿れば、日本語の一貫した歴史が描けるのではないかと考える。これまでの動詞活用の歴史的研究は、このような観点から行われることがほとんどなかった。それを本稿で試みようと思う。そして、動詞活用の歴史的な趨勢を明らかにしたい。なお、本稿の作業と考察は、現代方言の動詞活用を総合的に理解するための準備にもなる。

参考として、日本語史の時代区分(六区分)を簡単に記す。動詞活用の歴史に関して言えば、近代と現代は区別せず近現代と一括してよい。

- (2)a. 上代：奈良時代以前(-794年)
- b. 中古：平安時代(院政期を除く)(794-1086年)
- c. 中世 前期：院政期・鎌倉時代(1086-1333年)
後期：室町時代(1333-1603年)
- d. 近世：江戸時代(1603-1868年) 宝暦年間(1751-1763年)を境に前期と後期
- e. 近代：明治時代～昭和前期(1868-1945年)
- f. 現代：昭和後期以後(1945年-)

2. 動詞活用形の捉え方

2.1 対立する2つの捉え方

動詞活用史を概観する前に、動詞活用形をどのように捉えるかについて述べたい。動詞述部から動詞活用形を抽出する仕方は様々だが、ここでは「書く」「見る」を例にして、対立的な2つの捉え方を比べる。1つの捉え方は、音節単位で(3)のように分析し、(4)のように捉える(下線部が動詞活用形)。「ず」「けり」などの後接要素を便宜上「接辞」とし、活用語尾・接辞に の場合も認める。

- (3)a. 書く(四段) : [か+か]-ず [か+き]-けり [か+く]-
 b. 見る(上一段) : [み+]-ず [み+]-けり [み+る]-
 (4) [語幹 + 活用語尾] -接辞

もう1つの捉え方は、単音単位で(5)のように分析し、(6)のように捉える(下線部が動詞活用形)。後部要素を azu, ikei, u のように切り出し、(5b)のような母音語幹動詞の場合には、後部要素の頭母音の脱落や、子音の挿入が起こるものとする。

- (5)a. kaku(子音語幹) : [kak+azu] [kak+ikeri] [kak+u]
 b. miru(母音語幹) : [mi+(a)zu] [mi+(i)keri] [mi+r-u]
 (6) [語幹 + 接辞]

(4)と(6)では、「書かず」「見ず」のどの部分を動詞活用形とするかが異なり、(4)では「書か」「見」、(6)では「書かず」「見ず」が動詞活用形となる。江戸時代以来の伝統的な古典文法は(4)に近似的であり、現代語研究ではしばしば(6)を採る。

2.2 「基幹」の設定

本稿では、動詞述部を細かく観察するために、単音単位の捉え方によって分析・記述する。その際、動詞述部において動詞の語彙的意味を担い、かつ現実態として取り出せる部分を「基幹」と呼び、(7)のように規定する。例として「書く」「見る」を挙げる。

- (7)a. 子音語幹動詞の基幹 : [語幹 + 母音] kaka kaki kaku kake
 b. 母音語幹動詞の基幹 : [語幹 +] mi miru mire

(7a)の子音語幹動詞は、日本語の開音節性のために、子音で終わる語幹はそれだけでは存在しえず、母音を伴ってはじめて現実に取り出すことのできる形になる。これが「現実態」ということの意味である。これに対して、母音語幹動詞の場合は、語幹が母音で終わるので、それだけで現実態である。ただし、子音語幹動詞との平行性を考えて、語幹の後に があるものとし、その には やラ行要素 (ru, re など) などが当たるものとする。

このようにして設定した基幹を示しながら、前掲(4)と(6)の対立する2つの捉え方を図示すると、図1・図2ようになる。図1に示す(4)の捉え方では 基幹 = 活用形 になる。一方、図2に示す(6)の捉え方では 述部 = 活用形 で、その内部にある基幹は語幹と後部要素の一部に分割される。

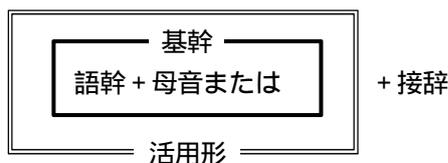


図1 活用形の認定と基幹 (4)の場合

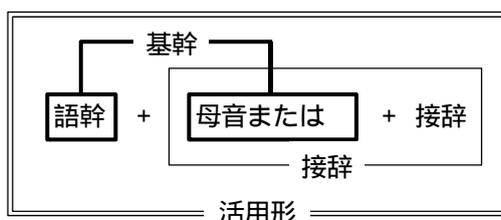


図2 活用形の認定と基幹 (6)の場合

どちらの捉え方を採用するかは、何を重視するかによって変わるだろう。「語」の自立性を重視すると、例えば kakazu の基幹 kaka はそれだけで自立できない形なので、動詞の一部にすぎないと見て、述部 = 活用形 という(6)の捉え方を採ることになる。

2.3 名詞の母音交替と動詞活用

その一方で、次のようなことも考えられる。上代では名詞の語末母音の交替が活発だった。奥舌 u、o、a と前舌 i、e の間で起こる母音交替は多くの場合、機能分化し、後部要素が必要な拘束形式（いわゆる「被覆形」）と、後部要素が必要でない自由形式（いわゆる「露出形」）の対を作る。例えば、(8a)の「月」は語末母音が拘束形式の u と自由形式の i で交替し、(8a)の「石」は拘束形式の a と自由形式の i で交替する（母音に添えた 1 と 2 は、上代特殊仮名遣の甲と乙を表す）。

- (8)a. 月：tuku(yo₁)月夜 tuki₂
- b. 石：isa(go₁)沙石 isi

これと平行的な母音交替現象が動詞に関しても見られる。(9a)の「尽」は接辞を伴う拘束形式では u が現れる位置に、連用形として自立できる自由形式では i が現れ、(9b)の「浮」は拘束形式と自由形式で a と i が交替する。

- (9)a. 尽：tuku(su) tuki₂
- b. 浮：uka(bu) uki₁

名詞において、(8a)の「月夜」を tuk+uyo₁ と分析するのは不自然である。「夜」を表す語は uyo₁ ではなく yo₁ であり、tuk に u または i₂ が付いた形を「月」とせざるをえない。(9)の動詞でこれに対応するのは tuku や tuki₂、uka や uki₁ である。たしかに tuku や uka は語構成の単位である語基であって、動詞の活用形そのものではないが、このような母音交替を基盤として、動詞活用は成立したと考えられる（小柳（2011）を参照）。そして、動詞において、(9)の語基に対応するのは基幹であ

る。古く「語」が語末の母音交替をしつつ存在したこと、その延長に動詞活用があることを重視すると、基幹=活用形 という(4)の捉え方を採ることになる。

2.4 動詞の活用型の種類

ところで、歴史的に見ると、ある種の基幹の使用が衰退している。例えば、(7a)に挙げた基幹 kaka は、上代では(10a)に例示するように盛んに使用されたが、現代(共通語)は(10b)の通り、否定の接辞-nai が付く場合にだけ使用され、その形で固定している。

- (10)a. 上代：kaka-zu kaka-mu kaka-zi kaka-masi kaka-ba kaka-na etc.
 b. 現代：kaka-nai

現代では、基幹 kaka をわざわざ活用形として特立するよりも、kakanai を1つの活用形として登録の方が経済的である。古典文法が 基幹=活用形 という(4)の捉え方を採り、現代語研究が 述部=活用形 という(6)の捉え方を採るのは、このような相違が関係しているのかもしれない。しかし、いずれにせよ、動詞活用の分析にとって基幹は重要である。基幹の形によって動詞の活用型が分類でき、歴史的変遷も明確になるからである。基幹の形に着目して、古典語の活用型の種類を次のように設定する。(11)と(12)は対立する2種類で、(13)は2つの中間に位置づける。

- (11) 型(四段=子音語幹)：基幹末の母音が交替し、基幹の長さが一定である。
 (12) 型(一段=母音語幹)：語幹末の母音が一定で、基幹の長さが変化する。
 (13)a. ラ変：型にきわめて近いが、基幹末の母音が一部異なる。型に対する変格。
 b. ナ変・力変・サ変：基幹末の母音が交替し、かつ基幹の長さが変化する。ナ変・力変・サ変の区別は、交替する母音の種類と数による。
 c. 二段：型に近いが、語幹末の母音が一部交替する。

歴史的に見ると、図3に示すように、中間的なものが型と型に吸収されて消失する。

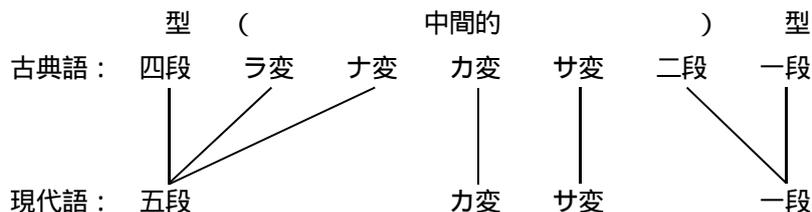


図3 活用型の種類の変遷

3. 動詞活用の歴史

動詞活用の歴史を見るにあたって、最初いくつかのことを凡例的に記す。まず、基幹=活用形 という捉え方を採る。活用型では基幹末の形が重要なので、それが見えやすいように、活用表では語幹と活用語尾を分けて示す。次に、設定する活用形の種類は、各時代によって異なるが、古典語に関しては次の9種類を設ける。名称は便宜的なものである。

- (14)a. 未然形：古典文法の「未然形」から「受身形」「使役形」を除いたもの
 b. 受身形：受身の接辞-ru が付く形
 c. 使役形：使役の接辞-su が付く形
 d. 連用形：古典文法の「連用形」に同じ
 e. 終止形：古典文法の「終止形」から「推定形」を除いたもの
 f. 推定形：推定の接辞-besi、-ramu、-rasi などが付く形
 g. 連体形：古典文法の「連体形」に同じ
 h. 已然形：古典文法の「已然形」に同じ
 i. 命令形：古典文法の「命令形」に同じ

古典文法の「未然形」を(14a)-(14c)の3つに分けるのは、受身形・使役形が特徴的な基幹を見せるからである。受身形・使役形は(15)のように分析して、受身・使役の接辞に-ru/-raru と-su/-sasu という異形態を認めるのが普通だが、本稿では(16)のように分析して、接辞を-ru と-su に統一する(小柳(2011)を参照)。

- (15)a. 型：kaka-ru kaka-su
 b. 型：mi-raru mi-sasu
 (16)a. 型：kaka-ru kaka-su
 b. 型：mira-ru misa-su

古典文法の「終止形」を(14e)(14f)の2つに分けるのは、-besi などがラ変に付く場合に関わる。普通は(17)の整理を採用しているが、本稿では(18)のように整理する。これは、鈴木胤『活語断続譜』(享和3(1803)年頃成)が行った処置である。

- (17)a. 終止形で終止する：kaku(型) miru(型) ari(ラ変)
 b. -besi などは原則的に終止形に付く：kaku-besi(型) miru-besi(型)
 c. ただし、ラ変には例外的に連体形に付く：aru-besi(ラ変)
 (18)a. 終止形で終止する：kaku(型) miru(型) ari(ラ変)
 b. -besi などは推定形に付く：kaku-besi(型) miru-besi(型) aru-besi(ラ変)

以上に基づいて、上代の動詞活用を作成すると、表1のようになる。表の右欄外に接辞を記した活用形は、その接辞が付くための専用形であることを示す。また、表中の太線右側は、ラ行要素などの付加という 型の特徴が見えるものである。表2以下も同様。

表1 上代の動詞活用表

	型		中間的					型	
	変格		4母音	3母音		2母音		上一段	
	四段	ラ変	ナ変	力変	サ変	上二段	下二段		
語幹	kak	ar	sin	k	s	ok	uk	mi ₁	
未然形	-a	-a	-a	-o ₂	-e	-i ₂	-e ₂	-	
受身形	-a	-a	-a	-o ₂ ra	-era	-i ₂ ra	-e ₂ ra	-ra	-ru
使役形	-a	-a	-a	-o ₂ sa	-esa	-i ₂ sa	-e ₂ sa	-sa	-su
連用形	-i ₁	-i	-i	-i ₁	-i	-i ₂	-e ₂	-	
終止形	-u	-i	-u	-u	-u	-u	-u	-ru	
推定形	-u	-u	-u	-u	-u	-u	-u	-	
連体形	-u	-u	-uru	-uru	-uru	-uru	-uru	-ru	
已然形	-e ₂	-e	-ure	-ure	-ure	-ure	-ure	-re	
命令形	-e ₁	-e	-e	-o ₂	-eyo ₂	-i ₂ yo ₂	-e ₂ yo ₂	-yo ₂	-

上代では母音交替が動詞活用の基本的な方法であり、唯一の型である上一段は特異である。これに加えて、上一段は所属語彙が10語程度しかなく、劣勢な活用型だと言える。型(上一段)は、母音交替が多様で所属語彙も豊富な型(四段)とは対等に対立する関係になかったのである。四段と対等の関係にあるのは二段、特に下二段である。「立つ(四段・自動詞/下二段・他動詞)」「焼く(四段・他動詞/下二段・自動詞)」のような、四段と下二段で自他対立を示す組が多数あるのも、このことを示している。

次の中古では、大きな変化がない。表2に中古の動詞活用表を掲げる。

表2 中古の動詞活用表

	型		中間的					型		
	変格		4母音	3母音		2母音		上一段	下一段	
	四段	ラ変	ナ変	力変	サ変	上二段	下二段			
語幹	kak	ar	sin	k	s	ok	uk	mi	ke	
未然形	-a	-a	-a	-o	-e	-i	-e	-	-	
受身形	-a	-a	-a	-ora	-era	-ira	-era	-ra	-ra	-ru
使役形	-a	-a	-a	-osa	-esa	-isa	-esa	-sa	-sa	-su
連用形	-i	-i	-i	-i	-i	-i	-e	-	-	
終止形	-u	-i	-u	-u	-u	-u	-u	-ru	-ru	
推定形	-u	-u	-u	-u	-u	-u	-u	-ru	-ru	
連体形	-u	-u	-uru	-uru	-uru	-uru	-uru	-ru	-ru	
已然形	-e	-e	-ure	-ure	-ure	-ure	-ure	-re	-re	
命令形	-e	-e	-e	-o	-eyo	-iyo	-eyo	-yo	-yo	-

通説では下一段(所属語は「蹴る」のみ)が発生したとされ、一往区別しておくが、表から明らかのように、上一段か下一段かは語幹の違いであって、活用型の区別ではない。なお、上代特殊仮

名遣の区別（母音に添えた1と2の区別）がなくなるのは、動詞活用史の問題ではなく、音韻史あるいは表記史の問題である。

次の中世では、大きな変化が起こった。ここでは、中世後期の動詞活用を取り上げ、表3にまとめる。

表3 中世の動詞活用表

	型	中間的					型		
		5母音	3母音		2母音		上一段	下一段	
	五段	ナ変	カ変	サ変	上二段	下二段			
語幹	kak	sin	k	s	ok	uk	mi	ke	
未然形	-a	-a	-o	-e	-i	-e	-	-	
意志形	-o	-o	-o	-yo	-yo	-yo	-#yo	-#yo	-R
受身形	-a	-a	-ora	-era	-ira	-era	-ra	-ra	-ruru
使役形	-a	-a	-osa	-esa	-isa	-esa	-sa	-sa	-suru
連用形	-i	-i	-i	-i	-i	-e	-	-	
終止連体形	-u	-uru	-uru	-uru	-uru	-uru	-ru	-ru	
已然形	-e	-ure	-ure	-ure	-ure	-ure	-re	-re	
命令形	-e	-e	-oi	-ei	-iR	-ei	-i	-i	-

最も大きな変化は、終止形と連体形の区別がなくなり、もとの連体形の形が終止形も兼ねるようになったことである。これを「終止連体の合一」「終止連体の同形化」などと言う。表では終止形と連体形を一括して「終止連体形」と呼んだ。この結果、ラ変が四段（新たに五段）に吸収され、ラ変がなくなれば推定形も不要になり（(17)(18)を参照）、終止連体形にまとめられる。また、新たに設けた「意志形」は、未然形から(19)の過程を経て分岐した。表中の型の欄の-#yoは、直音の miyo-R でなく拗音の myo-R であることを示す。

- (19)a. 型：kaka-mu kaka-N kaka-u kako-R
- b. 型：mi-mu mi-N mi-u myu-R myo-R

この結果、型にはoの母音が加わったので、活用型の名称を「四段」（4種類の母音が交替する意）から「五段」（5種類の母音が交替する意）に変更することになった。

続く近世でも特徴的な変化が起こり、さらに活用型の種類が減った。表4に近世上方語の動詞活用を示す。

まず、活用語では、上二段・下二段がそれぞれ上一段・下一段になった。これを「二段の一段化」と言う。前述したように、上一段と下一段の違いは語幹の違いだったから、活用品としては区別する必要がなく、型として1種類である。ここに至って、型は所属語彙数が劇的に増大し、型と対等の地位に向上した。中間的な活用品のうち、ナ変は終止連体形と已然形以外は五段と同じだったので、優勢な五段に吸収された。以後、型と型が大きく対立し、中間的なものとしてカ変とサ変だけが残る。

表4 近世(上方語)の動詞活用表

	型	中間的		型		
		3母音				
	五段	力変	サ変	一段		
語幹	kak	k	s	oki	uke	
否定形	-a	-o	-e	-	-	-N
意志形	-o	-oyo	-(i)yo	-yo	-yo	-R
受身形	-a	-ora	-era	-ra	-ra	-reru
使役形	-a	-osa	-esa	-sa	-sa	-seru
連用形	-i	-i	-i	-	-	
終止連体形	-u	-uru	-uru	-ru	-ru	
仮定形	-e	-ure	-ure	-re	-re	-ba
命令形	-e	-oi	-ei	-i	-i	-

次に、活用形では、未然形が否定の接辞-Nを伴う形で固定したので、名称を「否定形」に変更する。同様に、已然形も仮定条件を表す接辞-baを伴う形で固定したので、名称を「仮定形」に変更した。また、意志形が型では拗音のokyo-Rから直音のokiyo-Rに変わり、型として母音語幹okiが再生した。

最後に、近現代の動詞活用を見よう。現代の京都市方言の動詞活用を取り上げ作成したのが、表5である(国立国語研究所編『方言文法全国地図』参照)。こうして、上代から一貫して「中央語」の動詞活用の歴史を辿ることができる(第1節を参照)。なお、参考までに現代共通語の動詞活用表を表6に示す。

表5 現代(京都市方言)の動詞活用表

	型	中間的		型	
		3母音	4母音		
	五段	力変	サ変	一段	
語幹	kak	k	s	oki	
否定形	-a	-o	-e	-	-N
		-i	-i	-	-(ya)hen, -(R)hin
意志形	-o	-o	-yo	-yo	-(R)
		-iyo			
受身形	-a	-ira	-ira	-ra	-reru
使役形	-a	-isa	-a	-sa	-su
尊敬形	-a	-i	-i	-	-(ya)haru
連用形	-i	-i	-i	-	(参考)-, -masu etc.
過去形	-@	-i	-i	-	(参考)-ta, -te, -teru, -tara etc.
終止連体形	-u	-uru	-uru	-ru	(参考)-, -yaroR, -nara etc.
仮定形	-e	-ure	-ure	-re	-ba
命令形	-e	-oi	-eR	-	-
	-iR	-iR	-iR	-R	

表6 現代(共通語)の動詞活用表

	型	中間的		型	
		3母音			
	五段	カ変	サ変	一段	
語幹	kak	k	s	oki	
否定形	-a	-o	-i	-	-nai
意志形	-o	-oyo	-iyo	-yo	-R
受身形	-a	-ora	-a	-ra	-reru
使役形	-a	-osa	-a	-sa	-seru
連用形	-i	-i	-i	-	(参考) -, -masu etc.
過去形	-@	-i	-i	-	(参考) -ta, -te, -teru, -tara etc.
終止連体形	-u	-uru	-uru	-ru	(参考) -, -darōR, -nara etc.
仮定形	-e	-ure	-ure	-re	-ba
命令形	-e	-oi	-iro	-ro	-

近世とくらべて、現代の京都市方言は活用型の種類に大きな変化はないが、カ変とサ変に微妙な変化が認められる。京都市方言は、カ変・サ変の否定形・受身形に i の基幹が現れ、カ変では意志形・使役形にも i の基幹が現れている。これは 型化の兆しと見ることができる。その一方で、サ変の使役形には a の基幹が現れ、これは 型化である。このように、 型と 型の間で分裂の傾向が見られ、これは共通語でも同様である。

活用形について見ると、京都市方言ではいわゆるハル敬語のための「尊敬形」が見られるが、より重要なのは、 型の一部の動詞が連用形から「過去形」を分化させたことである。これは過去の接辞-ta などが付く形で、kai-ta, toN-da, utoR-ta などの音便形が義務的に現れる。表中の 型の欄の @ は音便形が現れることを示す。また、表の右欄外に(参考)として複数の接辞を示してあるのは、その活用形に複数の接辞が付くことを意味するのだが、注目されるのは、それが連用形・過去形・終止連体形だけで、それ以外の活用形は特定の接辞が付く専用形になっていることである。第2節4で述べたように、現代語では個々の基幹の使用が限定的で、固定しているのである。共通語も全く同様である。

7. 全体の趨勢

以上の概観から、全体の趨勢として大きく次の2つを読み取ることができる。

- (20)a. 活用型が 型と 型に二極化する。 型は古くは例外的だったが、後に所属語彙を増やして地位が向上した。
- b. 特定の接辞が付く専用の基幹 = 活用形(否定形・意志形 etc.)が増える。

先掲(11)と(12)の定義を見ると、 型と 型が最初から対等に対立していたように思われそうだが、実はそうではなく、 型と 型の対立という整った図式は、歴史的に形成されたものなのである。このようなことは現代語だけではわからず、歴史的な考察の価値が実感される。(20a)(20b)の趨勢は、活用型の減少と活用形の固定化を意味するので、全体として日本語の動詞活用は不活発な、

活用しない方向へ変化していると言えるだろう。

ところで、 mi_1 型の基幹末に現れるラ行要素は潜在的に型性を有している。上代の mi_1 型の基幹をラ行要素などを伴わない場合と伴う場合に分けて示すと、表7のようになる。参考としてサ行要素を伴う場合も挙げる。

表7 mi_1 型の型性

		未然形	受身形	使役形	連用形	終止形	推定形	連体形	已然形	命令形
型	mi_1	-			-					$-yo_2$
型性	mi_1r		-a			-u	-u	-u	-e	
	mi_1s			-a						
型	kak	-a	-a	-a	$-i_1$	-u	-u	-u	$-e_2$	$-e_1$

mi_1r の欄の空所が充たされれば型性が顕在化して、 mi_1 型に移行する。この時、新たな型動詞 mi_1ru の語幹 mi_1r はもとの語幹 mi_1 より子音1つ分長く、その子音はラ行である。現代の九州方言などではこのような変化が実際に見られ、時に「一段の(ラ行)五段化」と言われるが、これはもともと mi_1 型の基幹のラ行要素に由来するものである。動詞の語幹が基幹としてどのように実現し、そこに型性・ mi_1 型性という属性がどのように顕在するかに着目することによって、動詞活用を広く総合的に理解する準備が整う。

参考文献

- 有坂秀世(1957)『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂
 大木一夫(2010)「古代日本語動詞の活用体系 古代日本語動詞形態論・試論」『東北大学文学研究科研究年報』59
 川端善明(1979)『活用の研究』大修館書店；(1997)新装版 清文堂
 金水敏(2011)「統語論」『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店
 小柳智一(2004)「ベシ・ラシ・ラムの接続について」『国学院雑誌』105-2
 小柳智一(2008)「古典文法研究と古典文法教育 動詞の活用についての実践例」福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター『教育実践研究』16
 小柳智一(2011)「上代の動詞未然形 制度形成としての文法化」『万葉語文研究』6
 小柳智一(2012)「被覆形・情態言・形状言・情態性語基」『日本語文法史研究』1
 鈴木重幸(1996)『形態論・序説』むぎ書房
 高山善行・青木博史編(2010)『ガイドブック日本語文法史』ひつじ書房
 中山昌久(1984)「動詞の活用」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法2 用言編(一)動詞』明治書院
 中山昌久(1990)「語形交替のひとつの場合」『国文学 解釈と鑑賞』55-7 至文堂
 日本語記述文法研究会(2010)『現代日本語文法』くろしお出版
 丹羽一彌編著(2012)『日本語はどのような膠着語か』笠間書院
 三原健一・仁田義雄編(2012)『活用論の frontline』くろしお出版
 屋名池誠(1987)「活用 現代東京方言の形態 = 構文論的記述〔2〕」『学苑』565
 山口佳紀(1985)『古代日本語文法の成立の研究』有精堂